

教員の長期県外派遣研修報告 — 県外に学び、県内に還す —

【教員の長期派遣研修の目的】



教員に、県外教育機関等における業務体験の機会を提供することにより、他県等の教育実践に教員として携わることによる教育的視野の拡大、対人関係能力の向上等、学校教育の課題解決に必要な資質の向上を図るとともに、研修を通じて得たものの見方や考え方を本県の学校教育の場に還元し、もって学校教育の一層の活性化を図る。

【令和元年度派遣教員、派遣学校及び研修内容】



派遣教員：糸島市立前原東中学校 主幹教諭 上田 暁
派遣学校：東京都千代田区立麴町中学校
研修内容：「当事者意識を高める組織運営」

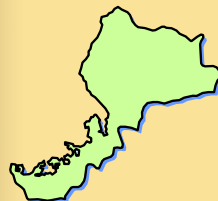


派遣教員：大野城市立大城小学校 教諭 衛本 幸恵
派遣学校：岐阜県岐阜市立長良西小学校
研修内容：「人材育成及び学力向上」

【令和2年度派遣教員、派遣学校及び研修内容】



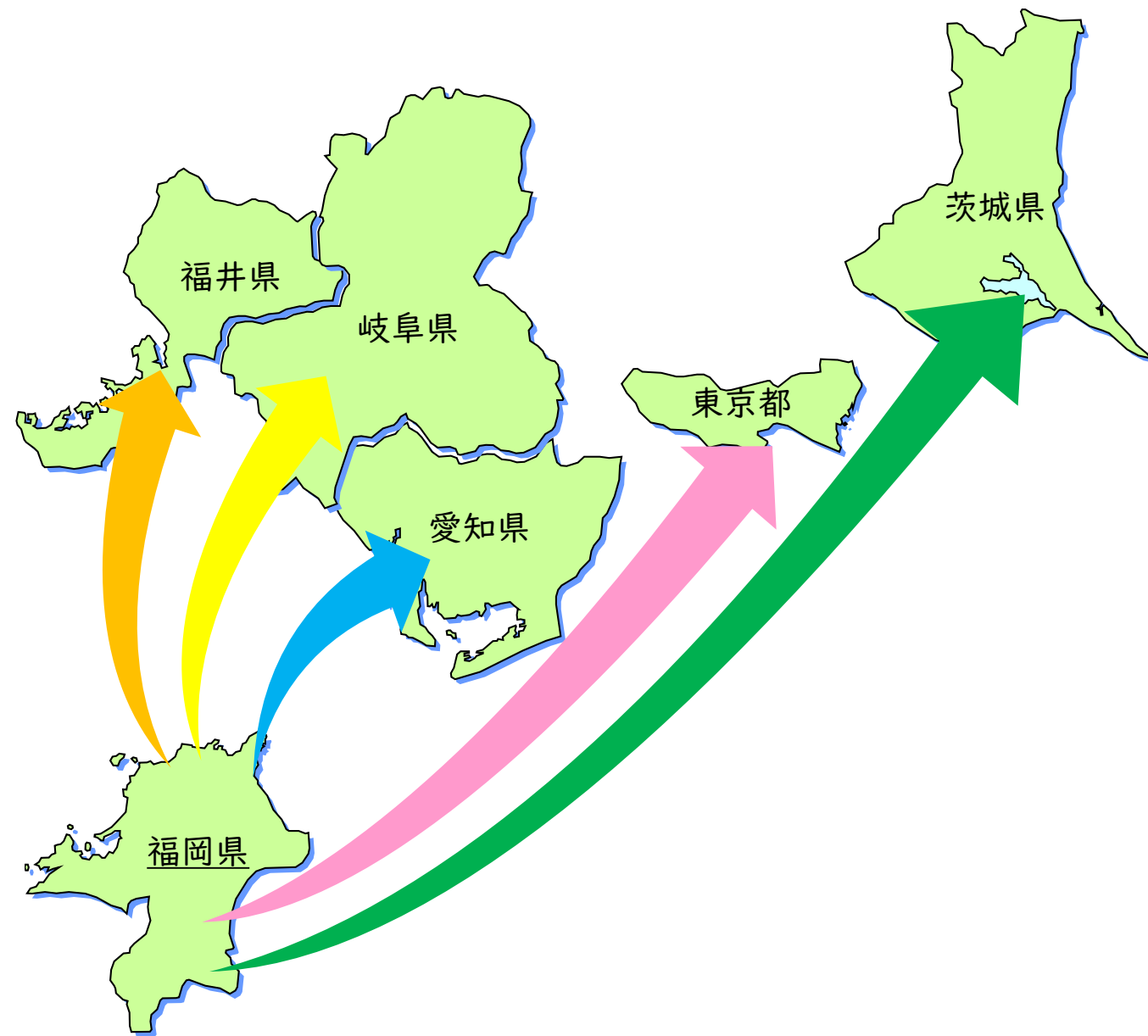
派遣教員：那珂川市立安徳北小学校 教諭 原田 雅義
派遣学校：愛知県春日井市立出川小学校
研修内容：「ICT推進及び組織運営」



派遣教員：中間市立中間中学校 教諭 永里 俊美
派遣学校：福井県福井市足羽第一中学校
研修内容：「学力向上及び授業改善」



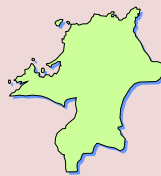
派遣教員：久留米市立善導寺小学校 教諭 谷川 康一
派遣学校：茨城県つくば市立みどりの学園義務教育学校
研修内容：「SDGs及びICT活用」



令和3年3月
福岡県教育委員会

当事者意識を高める組織運営のここがポイント

- 実効性を高め、評価・改善を可能にする「**目標の明確化・共有化**」
- 当事者意識を高め教育的効果を高める「**対話ができる職員集団**」
- スピード感をもった意思決定につながる「**Do-PCDAサイクル**」



県外で学んで感じたこと・考えたこと

麴町中における研修では、大人が子供に「与える」ことから、子供が本来もっている主体性を「支援する」大切さと多様な考えを尊重し、「対話」によって目標に立ち返って「合意形成する手法」を学びました。



「目標の明確化・共有化」



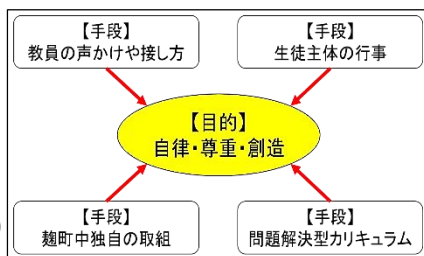
【学校教育目標】「どんな生徒を育てるのか」と【具体的な方策】「そのために、何を大切にするか」を共有し、教員一人一人が説明することができています。

「対話による最上位目標の設定」

- 目標をみんなが言葉にでき、同じ姿を描くために
 - ・キーワードで端的に示す
(育てたい生徒は「自律」・「尊重」・「創造」)
 - ・目標を達成するための具体的な方法を決める
(自己決定と対話によって方法を決める)
 - ・常に目標に立ち返り、具体的な姿を言葉にする
(目標を一本化し学年・学級目標は設定しない)
(体育祭での自律とは、尊重とは、創造とは…)
- ※目標設定において大切なこと
 - みんな違って、みんながOKの目標設定をする
 - 「みんな違って」:考え方の多様性を認める
 - 「みんなOK」:誰一人取り残さない目標にする

「目的と手段の区別」

- ・常に目的を意識
(手段の目的は何か)
- ・目的とのつながり
(目的達成に効果的か)



学校教育目標を意識した指導ができる

教員一人一人が、常に「学校教育目標」に立ち返って指導するとともに、取組を評価・改善することで実効性を高めています。

「対話ができる職員集団」



教員、児童生徒、保護者が対話できるような環境や雰囲気づくりを行い、目標に立ち返りながらアイデアを生み出したり、考えを共有したりしています。

「対話を通して合意形成を図る」

- 対話をしやすい環境づくり
 - ・ホワイトボードを校内の各所に設置する
 - ・会議やミーティングで活用し考えを整理・共有する
- 対話をしやすい雰囲気づくり
 - ・担当主任がリーダーシップを発揮し気運を高める
 - 「前向きな姿勢が教育的効果を高める」
 - 「できない理由よりもできる方法を探す」

「教員、生徒、保護者の対話による年度末反省」

- ブレインストーミングやKJ法を活用する



3つの視点

- ①目標達成を妨げているもの
- ②手段が目的化しているもの
- ③非効率的なもの

対話によって当事者意識が醸成できる

様々な意見を互いに尊重しながら対話できることが、教員や生徒、保護者一人一人の当事者意識を高め、学校としての生産性(教育的効果)を高めています。

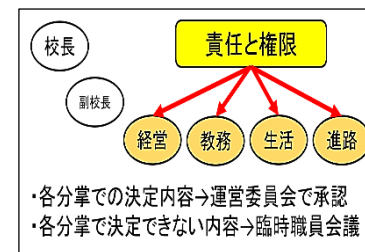
「Do-PCDAサイクル」



主任に一定の責任と権限が与えられることで、担当主任の当事者意識が高められ、目標達成に向けた対話が各種部会で行われています。

「主任の責任と権限による意思決定」

- 運営委員会の在り方
 - ・各主任と校長が繰り返し対話し、ビジョンを共有
 - ・学年主任ではなく校務担当主任が提案し決定
 - ・決定事項を学年会で共有



- 意思決定のはやさ
 - ・大まかな計画をもとに、やってみて(Do)、詳細の計画を立てる(Plan)ことでスピード感ある決定に

「当事者意識が高い集団づくりのために」

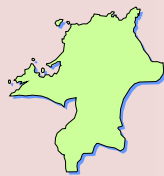
- 失敗してもよい
 - ・失敗を恐れず、失敗から学ぶことが大切
- 出る杭は打たない
 - ・物事への積極的な取組が成長につながる
- 生徒を主役にして学校をつくる
 - ・周りの大人(教師、保護者)は支援者である

当事者意識が取組として発揮できる

学校に関わる教員、生徒、保護者がもった当事者意識が、取組の中で十分に発揮できる場があることで、効果的に機能しています。

人材育成及び学力向上のここがポイント

- 視野を広げ経験を豊かにする「人材育成システム」の構築
- 教員の専門性と集団の凝集性を意識した「組織づくり・小中連携」
- 「子供目線の授業づくり」の継続的な積み重ね



県外で学んで感じたこと・考えたこと

質の高い教育をするためには、教師主導の授業をするのではなく、子供が見方・考え方を働かせたくなる場を位置付け、子供目線の授業を毎時間、積み重ねることが大切であるとあらためて思いました。



「人材育成システム」



岐阜県では人事異動を教員の視野を広げ、経験を豊かにするチャンスととらえ、「異校種間の異動」と「研修校への派遣」を積極的に行っています。

「異校種間の異動」

○小・中学校の両方を経験できる人事異動

- ・経験年数に関係なく異校種への積極的異動
- ・毎年25%程度の教員が異校種へ異動
- ・小中両方の教員免許の取得を推奨

区分	計	
小学校→小学校	778人	
中学校→小学校	238人	13%
小学校→中学校	204人	12%
中学校→中学校	412人	
その他	138人	
計	1770人	

「研修校、実習校への派遣」

- 研究実践を積極的に行い、指導力を育成
- ・研修校では地域の中核教員を育てる
- ・実習校では教育実習生を受け入れる
- ・実習生への指導を通じて教員も育つ

小学校47校	
◎長良小	○柳津小
◎加納小	○黒野小
◎長良西小	○竹鼻小
◎長良東小	○那加第二小
◎岐大附属小	○鶴沼第三小
研修校であり	○高富小
実習校5校	○牛牧小
	○生津小
	○席田小
	○笠松小
	○岐南・西小
	研修校11校

視野と指導の幅を広げることができる

教員にとって校種の垣根を越えて学ぶことや研究実践に取り組むことは、視野と指導の幅を広げ、教員が自ら育っていくシステムとなっています。

「組織づくり・小中連携」



指導力を向上させる組織として、「教科部会」と「学年部会」があり、教科と学年をつなげながら指導力を向上させ、教育活動を推進しています。

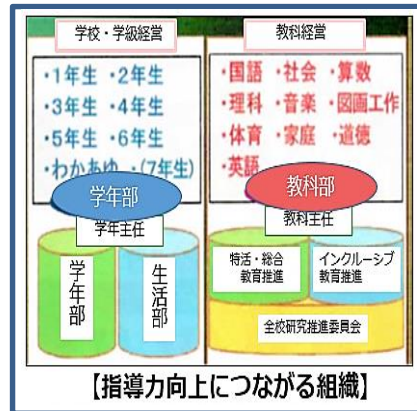
「組織づくり」

○教科部会

- ・研究主題に基づき各教科等の指導方法について協議

○学年部会

- ・交換授業や発達段階に応じた支援の協議



「小中連携」

○ONN会（長良西小と長良中の合同研修会）

- ・目指す子供像、指導方法の共有

ONN会（小学校の学びを継続・発展させるため）



学び合い専門性を高めることができる

小学校・中学校の教員が専門性を高める機会となり、児童生徒の実態把握に基づいた各教科等の見方・考え方を働かせる授業づくりにつながっています。

「子供目線の授業づくり」



授業改善のポイントをもとに「授業公開」を積極的に行い、学習している子供を見る眼を養いながら教科の特質を大切にした授業改善が行われています。

「授業公開」

○授業後の協議

- ・教員が何をしたかの前に子供の姿や発言を整理する
- ・意見を出し合い切磋琢磨する
- ・多くの授業を見ることで子供や授業を見る眼を養う

授業公開

転入者研	転入者は、4月に1時間授業管理職から指導本校が目指す授業を行う上で自分が足りない部分を明確にできる。
全校研究会	全研（各教科・特別活動・総合の学習の時間）等の授業参観（年10回）参観後の協議会やOBの指導により、目指す子供の姿を共通理解授業力向上にもつながらる。
内示会	教育公開（10月）に向けて、OBの指導を受けながら実践を進める。指導技術伝承の場内示会は年2回（6月、9月）実施。

「授業づくり」

○共通と具体

- ・共通部分は導入、展開、終末のポイントのみ
- ・活動や手立て等は各教科の特質を踏まえ具体化

1単位時間の各段階における指導のポイント

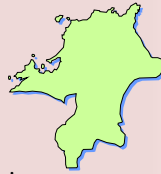
- ・導入→子どもの意識のゆさぶり（見方・考え方を働かせて課題を設定するため）
- ・展開→発問や学習形態の工夫適用を図る問題提示（見方・考え方を働かせ、豊かにするため）
- ・終末→「創り出す場」の位置づけ（成就感・満足感を感じ、学ぶ目的をもつことができるようにするため）

学力を向上させる授業ができる

教員が何を教えたかではなく、子供が何を学んだかを具体的に捉えながら意見を出し合う協議にすることで、学力を向上させる授業につながっています。

ICT推進及び組織運営のここがポイント

- 教員が当事者意識をもてる「ICT推進のための組織運営」
- 情報活用能力の段階的な育成を促す「ICTを活用した学習支援」
- クラウドを活用し業務の効率化に資する「ICTを活用した校務支援」



県外で学んで感じたこと・考えたこと

10年前から先進的にICT化を推進してきた出川小学校での研修は、これからICT化を進めていく上で大変参考となりました。1年間の充実した学びを生かし、組織運営を通してICT化の推進に貢献していきます。



「ICT推進のための組織運営」



ICT推進を組織的に行うために、「推進組織の機能化」と、「教員一人一人の当事者意識の醸成」を大切に推進しています。

「ICT推進組織の機能化」

- 役割を明確にした推進組織をつくる
 - ・検討部：情報活用能力の育成計画を設定・検証
 - ・資料部：ICT活用の学び方や好事例の情報発信
 - ・ICT部：教員のICTスキル向上の研修企画・運営
- 各部の連携を図る定期的な協議
 - ・各部の進捗状況、データに基づいた評価の実施

「教員一人一人の当事者意識の醸成」

- ICT活用についてOODAループを大切にする
 - ・Observe【観る】
(子供の実態を観察する)
 - ・Orient【分かる】
(実態に合う方法を考える)
 - ・Decide【決める】
(活用方法を決める)
 - ・Act【動く】
(授業で実践する)
- ※教えやすく、学びやすいを大切にICTを活用する。



活用場面を意識した推進ができる

推進組織による検証、改善は、具体的な活用場面を明確にすることで「どのように使えば、効果があるのか」を意識した活用につながっています。

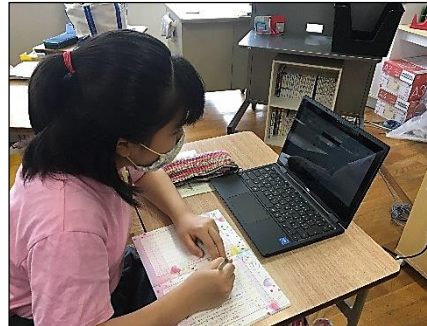
「ICTを活用した学習支援」



児童がICT機器に「慣れる」「使う」「使いこなす」の情報活用能力育成のステップを意識した活用と支援を大切にしています。

「慣れる」

- 登校後
 - ・連絡事項の確認
 - ・「心の天気」の入力
(ワンクリック操作)



「使う」

- 授業の導入段階(Formsを活用)
 - ・自動集計されたアンケート結果の資料を提示する
- 授業の終末段階(スプレッドシートを活用)
 - ・学習の振り返りを同じシートに入力し記録する

「使いこなす」

- 授業の展開段階
 - ・クラウドと共同編集アプリを活用することで、情報と活動の共有が可能になり、効果的な学習支援ができる。



段階的な活用で効果的な支援ができる

児童生徒の発達段階を踏まえながら、日常的に活用場面を設定することで、情報活用能力の効果的な育成につながっています。

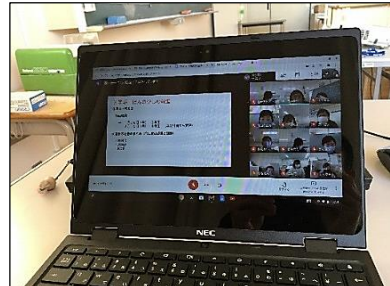
「ICTを活用した校務支援」



ICTを活用した校務支援として、クラウド活用した「オンライン会議」「共同編集による情報共有」「データの共有」によって校務の効率化が図られています。

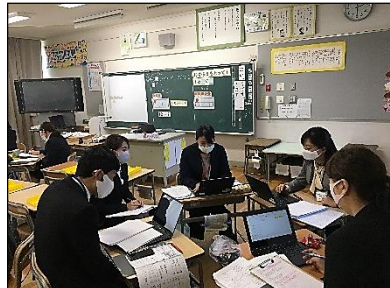
「職員会議」

- ペーパーレスの会議
 - ・オンラインで実施
 - ・資料の説明は画面共有
 - ・必要に応じて各自印刷



「授業研究会での協議」

- 成果と課題、意見の記録
 - ・スプレッドシートを活用
 - ・共同編集で各自入力
 - ・メンバーはリアルタイムに情報を共有



「指導案審議」

- 確認、質問、意見の記録
 - ・共有ドライブをクラウド上に作成
 - ・各自が指導案にコメント
 - ・授業者はコメントを参考に授業づくり

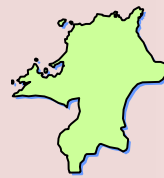


情報の発信、共有がその場でできる

一斉に作業ができたり、その場で情報共有ができたりすることで、事前準備や移動・集合、議事録等の作成を軽減し、業務改善につながっています。

学力向上及び授業改善のここがポイント

- 学力、授業力向上に特化した「タテ持ち教科担当システム」
- 日常的、継続的な学習を促す、授業以外での「学習プログラム」
- 「小学校と連携しながら授業改善」していく機会や時間の確保



県外で学んで感じたこと・考えたこと

特に感銘を受けたのは、全教職員が協働して取り組む授業改善と生徒の基礎学力定着のための徹底された指導でした。今後は、福井での学びを自校や地域の教育活動に還元していきたいと思ひます。



「タテ持ちの教科担当システム」



教員同士が学び合う「教科会」が、全学年の学習指導を可能にする「タテ持ち教科担当システム」を支えています。

「タテ持ちの教科担当システム」

○ 学年所属に関係なく全学年を各教員が担当する。

- ・ A先生 (1年担任)
- ・ B先生 (2年担任)
- ・ C先生 (3年担任)

※ 各教員が1～3年の担当をする
※ 各学年の授業と評価を統一する

1年	1組	2組	3組	4組
2年	1組	2組	3組	4組
3年	1組	2組	3組	4組
	A先生 (1年団)	B先生 (2年団)	C先生 (3年団)	

「タテ持ちを支える教科会」

○ 教科会での確認、協議内容

- ・ 各学年の授業の進度状況
- ・ 生徒の学習内容の定着度
- ・ 宿題の内容、提出状況
- ・ 教員同士の授業参観
- ・ 協働による定期考査作り
- ・ 共通する課題の分析、対策



※ 教科会の実施は、時間割に位置付けられている

教員の専門性を高め、発揮できる

教員同士の学び合いにより、各教科の学習を体系的に理解していくことは、授業力の向上や発揮の根幹を成し、生徒の学力向上に大きく寄与しています。

「授業外での学習プログラム」



生徒の日常的・継続的な学習を促す取組として、小テストと宿題を連携させ、学校と家庭の学習をつながりながら基礎的な学力の定着を図っています。

「各学年で検討して実施される学力向上の取組」

○ 朝学習の取組 (8:00～8:20)

- ・ 読書、ドリルコンテスト、確認テストの過去問
- ・ 自学ノート半ページ、テスト勉強など

○ 放課後学習の取組 (16:10～17:00)

- ・ ドリルコンテスト (合格するまで実施)
- ・ 居残り学習 (木曜日) (宿題未提出生徒等)



○ 学習タイム (昼休み) や学習会 (放課後) ※3学年のみ

- ・ 過去の確認テスト、学力診断テスト対策

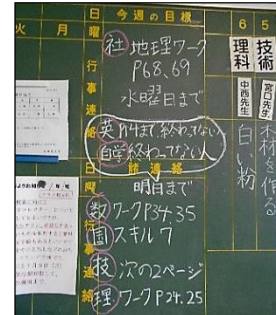
「生徒が日常的に取り組む課題」

○ 学年課題

- ・ ドリコン対策プリント
- ・ 自学ノート (週末)
- ・ 学年で購入した問題集など

○ 各教科の課題

- ・ 毎日異なる課題



基礎的な学力、学び方、学習習慣の定着

基礎的な学力を定着させるとともに、学び方、学習習慣を身に付け、学ぶことへの喜びや達成感を味わうことにつながっています。

「小学校と連携した授業改善」



授業改善は、「主体的・対話的で深い学び」を共通の視点に、校長のリーダーシップのもと小学校と連携した授業づくりによって構築されています。

「校長のリーダーシップによる授業改善」

○ 校長の指導助言

- ・ 校内研修
→ 深い学びにつながる指導方法の指導助言
- ・ 教科会
→ 各教科の特質を踏まえた適切な指導助言

「学びをつなぐ学校文化」

○ 校種を超えた人事異動、教員免許の取得

- ・ 多くの教員が小学校・中学校の教員免許を有し、勤務経験があるため9年間を見通した指導が日常的に行われている

○ 小・中で重視する活動の浸透・徹底

- 「思考を働かせ、根拠をもとに表現する活動」
- ・ 書いて説明する活動
- ・ 対話しながら考えをを広げ深める活動
- ※ 学習活動は変えない

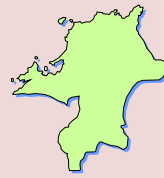


子供の学びをつなぐことができる

小・中学校の勤務経験によって、発達段階を踏まえた教科横断的な視点での「書いて説明する活動」「対話で考えを広げ深める活動」の充実が図れています。

SDGs及びICT活用のここがポイント

- 学習活動の充実につながる「SDGs」の教育課程への位置付け
- 日常的に使う機会を保障した「ICT活用」スキルの育成
- 教員の働きやすさと子供の学びやすさに資する「校務の情報化」



県外で学んで感じたこと・考えたこと

つくば市がめざす教育に携われたことで、知見を広げることができました。「学びを止めない」というキーワードからスタートした研修期間でしたが、私自身も学び続けること、人とつながる大切さを実感しました。



「SDGs(内容・視点)」



持続可能な社会の創り手の育成を目指し、SDGs(持続可能な開発目標)を内容や視点とした社会に開かれた教育課程を展開しています。

「持続可能な社会の創り手を育成」

- これからの学校教育に求められていること
 - ・教育の目的及び目標の達成を目指す
 - ・児童が自分のよさや可能性を認識する
 - ・他者を価値のある存在として尊重する
 - ・人々と協働しながら社会的変化を乗り越える
 - ・豊かな人生を切り拓く

「SDGsを内容・視点にした学習活動」

- 授業で大切にしている活動
 - ・自分事として考え問題意識をもつ
 - ・仲間とともに学習活動に取り組む
 - ・体験や成果等の学びを発信する



リアリティのある教育活動が推進できる
個々の取組に「持続可能な社会の構築」という共通の目的をもたせることで、子供が実現可能な問題解決を目指した探究活動が実現できています。

「ICT活用(手段・方法)」



SDGsを内容や視点にすることにより、ICTの活用が必然的に求められ、子供の学習意欲や興味関心を高めながら次世代の人材育成に取り組んでいます。

「子供の力を最大限引き出す教育」



つくば市全体で「つくば7C学習」に取り組んでいる。

「学習の手段・方法として日常的に活用」

6年 国語科「まちの未来をえがこうー町の幸福論」

- ・自分の住む町の未来を文章と資料で説明する
- ・説明動画を視聴しながらオンラインで助言し合う
- ・共同編集で記録する



一人一人の子供の学びが支援できる
子供の意欲や興味関心をさらに高めたり、能力や進度に応じたコンテンツを提供したりすることで、一人一人の学びの効果的な支援につながっています。

「校務の情報化(基盤)」



Microsoft Teamsを活用して「情報の発信・共有」と「情報の編集・整理」をいつでも、どこでもできるようにして、教員の働きやすい環境づくりを推進しています。

「情報の発信・共有・共同編集」

○連絡の通知、アンケート、情報提供、使用割



働きやすさと学びやすさが実現できる
校務の情報化は、教員の働きやすさの実現とともにICT活用の機会を増やし、教員の活用能力が子供たちの学びやすさの支えにもなっています。

県外に学び、県内に還し、学校教育の活性化に

組織が機能し、学校が活性化する

Point 1 明確かつ魅力的なVisionを設定する

組織が機能するために、ビジョン(目標)は明確で、魅力的であり、所属職員が「同じキーワードが言える」ことを大切にする。

Point 2 状況の理解と納得を促すCommunication

組織が効果的に機能するために、教職員、児童生徒、保護者が対話を通じて、目標や現状等の理解を深め、納得感をもてるようにする。

Point 3 MissionとPassionを大切にする

組織が活性化するために、一人一人の教職員の使命感と熱意を大切に、当事者意識をもった取組が促進される仕組みや場をつくる。

授業が変わり、学力が向上していく

Point 1 学習者目線で授業を考え、振り返る

児童生徒の資質・能力の育成のために、教員は教えることよりも、児童生徒が学ぶ意味を実感できるように支援する。

Point 2 よき学び方ができる学習者を育てる

校種や学年によって学習内容は変わっても学び方は共通し、学習者の義務教育9年間はつながっている意識をもつ。

Point 3 目標と取組と評価のつながりをつくる

児童生徒が自ら学び続けるために、日々の宿題や課題への取組を適切に評価し、やる気と自信につなぐ仕組みをつくる。

ICTを楽しく使い、豊かに使いこなす

Point 1 カリキュラム・マネジメントの推進

目指す資質・能力を育成するために、教科横断的な視点でICT活用を促す社会に開かれた教育課程を編成・実施し、評価・改善する。

Point 2 校内研修の充実

教員のICT活用能力を育成するための組織を編成し、授業場面を想定した効果的な研修を実施し、授業での活用を推進していく。

Point 3 校務支援としての積極的活用

働き方改革推進のために、集合して行うべき協議と各自で行うべき連絡確認等を精査し、ICTを活用した校務支援を積極的に導入する。

教員が学び合い、育っていく

Point 1 プロとしての専門性を高める意欲の醸成

自己の目標達成に向けたPDCAサイクルを循環させるために、自主的に学び、成長しようとするプロとしてのモチベーションを高める。

Point 2 学んだことを発揮して自信につなぐ支援

教員相互の成功体験につなぐために、情報提供や相談体制など、繰り返しの授業実践を支援する組織的な仕組みや場をつくる。

Point 3 異なる考え方に触れる機会の確保

多様性をもった児童生徒の教育のために、校長が教員自身の視野や指導の幅を広げていくことの意義と具体的な取組例を示す。